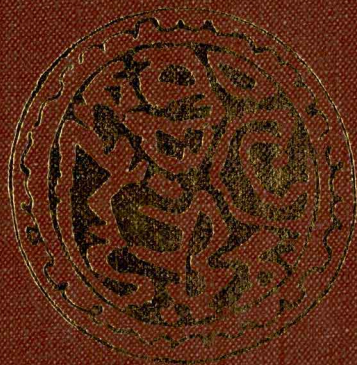


吉田精一 編

日本文学鑑賞辞典

近代編



吉田精一 編

日本文学鑑賞辞典

近 代 編



東京堂出版

索引

人名 1 ~ 11

作品・事項 12 ~ 37

日本文学鑑賞辞典 (近代) 定價三二〇〇円

昭和三十五年六月三〇日 初版発行
昭和六〇年三月一〇日 二八版発行

編者 吉田 精一

発行者 澄田 讓

印刷所 文殊印刷有限公司

製本所 渡辺製本株式会社

発行所 株式会社 東京堂出版

東京都千代田区神田錦町三ノ七(〒100)
電話 東京(三三)七四一 振替 東京 千三〇

1591-135040-5164

©Seiichi Yosida 1960

S 87/47 (日7-3/83-J)

日本文学鑑賞辞典
《近代編》

BG 000620

序 文

文芸作品は、社会的、歴史的産物として、その作られた社会や、歴史的状況を反映していることはもちろんである。われわれはそれを通じて特定の時代の、特殊な環境にあった人間の、思想や感情や、また彼らが追求していた問題を、ききとることができる。一つの作品を理解するにあたり、われわれはことに社会環境と周囲の条件とをこまかく調査することによって、その意義を正しく読みとる努力をわれわれ自身に課さねばならない。

しかしまた、文芸作品はたんなる記録や報告ではない。それが長い年月の風雪にたえて、今日の読者にもうったえる力をもっているのは、そこに時間と歴史とをこえる不滅の生命力と、不変の美しさを内在しているからにはかならない。

一見すれば前者は、「知る」ことを中心命題とし、後者は、「味う」ことを目的とし、ともに別のみちを歩むように見える。前者が「真」をめざすならば、後者は「美」を志しているかのである。しかしわれわれの考えるところによれば、両者は決して別のものではない。正確に「知る」ことによって、ふかい「味い方」がうまれ、深い「味い方」を待って、正しく「知る」ことができる。われわれの仕事の理想は、それが容易には達せられないことを承知の上で、パスカルのいわゆる「幾何学的精神」と「繊細な精神」との合致の上に置かれねばならない。

従来の文学辞典は、辞典としての客観性を尊重するという意味もあって、重点を主として文献学的な方面に置き、深く味うという鑑賞面には粗漏であった。当然、「辞書的な」という形容詞が表現する、平板

で砂を噛むような叙述でみたされる場合が多かった。ことに国文学方面のものには、その種の傾向が強く、辞典ほど面白い読み物から遠い性格のものはなかったのである。

本書は、この点にかんがみ、正しい文献学的な調査研究は踏まえつつも、それを幾分裏にまわし、意義内容をいかに読み味うべきかという、鑑賞面を主眼として、新しい編纂をこころみた。「文学鑑賞辞典」と銘うったのは、その理由からである。

このために、古典・近代の二編を通じて、日本文学史上の名作佳編をできる限り網羅し、忠実な解説に加えて、正しく深い鑑賞による価値判断と、史的意義の設定をこころみた。出来栄えについては、大方の批評を待つべきだが、作品の本質的な解明と味解という点では、在来の辞書類から数歩前進することを期したのである。

初学の人たちにとっては、日本文学鑑賞の手引き書となり、研究者や教授者にとっては参考して役立つものとなり、一般の人々にとっては、独立した興味ある読み物となるというのが、この書編集のねらいの一つでもあったが、多少ともその目的が達せられているとすれば、編者としてよろこびに耐えないのである。

なお、このしごとのために、中堅、新進の専門家数十名の参加をねがったが、ことに編纂者としては、村松定孝、石丸久、関良一、三好行雄の諸氏に担当していただいた。ここに記して深い感謝の意を表する。

昭和三十五年首夏

吉田 精一

凡 例

△本書は、明治・大正・昭和の三代にわたる日本文学全般から約六五〇の作品を選び、各作品に鑑賞を施すことを主眼とした。

△項目は、各作品を五十音順に配列して構成した。したがって、作家名の方から作品を検出するときは、巻頭の作家別項目表または巻末の索引によると便利である。

△各作家の略歴は、「作者」として項目の末尾に付した。ただし主なる結社関係、主要作品などをあげるに止めた。（各作家についての詳細は弊社既刊の『近代日本文学辞典』を参照されたい）

一作家で二作品以上収載した場合、その作家の略歴は、五十音順による最初の項目末尾に付した。たとえば、志賀直哉の場合、『城の崎にて』『和解』『小僧の神様』『暗夜行路』を収めたが、その略歴は『暗夜行路』の項の末尾に示してある。

△小説 戯曲の場合は、「梗概」を設け「鑑賞」の一助とした。作品集（随筆集・詩集・歌集・句集その他）を項目とした場合は、その中の代表的な作品をよくに取りあげて解説・鑑賞を施した。

用語・符号・索引

△引用文は、原則として原文のままにした。

△難読の語には、つとめてルビを付した。ルビは原文にあったものも現代表記法に統一した。

△作品名・書名・雑誌名・新聞名には、すべて「」をつけた。

△本文中に*印のある作品名は独立項目として収録されていることを示す。

△短歌・俳句の引用は、Λ Vで示した。代表作品をよくに解説、鑑賞するときはこれを別行に示し、Λ Vは省いた。

△作品の発表年月、雑誌の発行年月に、明・大・昭和あるのは、それぞれ明治・大正・昭和の略。たとえば、（明三九・三）は明治三九年三月を示す。

△索引は、「人名索引」と「作品・事項索引」とに分け結社・雑誌などは後者に含めた。

執筆者・編集者

△各項目の執筆は、それぞれ専門家に委嘱し、各項目の末尾にその姓名を明記した。

△編集は、吉田精二が責任者となり、委員として石丸久、関良一、二好行雄、村松定孝の四名が参加した。

作家別項目表

作家別項目表 目次

(五十音順)

会津八一	三六
鹿鳴集	三六
青木月斗	三三
月斗翁俳句抄	三三
阿川弘之	三七
雲の墓標	三七
秋田雨雀	三六
国境の夜	三六
芥川竜之介	三六
河童	三六
蜘蛛の糸	三六
戯作三昧	三六
玄鶴山房	三六
西方の人	三六
地獄変	三六
侏儒の言葉	三六
齒車	三六
鼻	三六
奉教人の死	三六

藪の中	三七
羅生門	三七
安部公房	三三
壁	三三
阿部次郎	三三
三太郎の日記	三三
阿部知二	三三
冬の宿	三六
安倍能成	三六
朝暮抄	三六
有島武郎	三六
或る女	三六
生れ出づる悩み	三六
惜みなく愛は奪ふ	三三
カインの末裔	三三
星座	三三
有吉佐和子	三三
地唄	三三
荒地詩集	三三

阿波野青畝	三三
万両	三三
安西冬衛	三三
軍艦茉莉	三三
飯田蛇笏	三三
山嵐集	三三
池内たけし	三三
たけし句集	三三
池谷信三郎	三三
望郷	三三
石井桃子	三三
ノンちゃん雲に	三三
乗る	三三
石井露月	三三
露月句集	三三
石川 淳	三三
夷斎俚言	三三
諸国崎人伝	三三
普賢	三三
石川啄木	三三
一握の砂	三三
悲しき玩具	三三
啄木日記	三三
呼子と口笛	三三
石川達三	三三
生きてゐる兵隊	三三

風にそよぐ葦	三三
蒼氓	三三
人間の壁	三三
石坂洋次郎	三三
石中先生行状記	三三
若い人	三三
石田波郷	三三
惜命	三三
石原 純	三三
豊日	三三
石原慎太郎	三三
太陽の季節	三三
石森延男	三三
コタンの口笛	三三
泉 鏡花	三三
歌行燈	三三
婦系図	三三
高野聖	三三
照葉狂言	三三
日本橋	三三
石上玄一郎	三三
資金分割	三三
伊藤永之介	三三
鷺	三三
伊藤左千夫	三三
左千夫歌集	三三

[illegible]

作家別項目表

虫のいろいろ	三六	開高 健	二五七	川上眉山	二五五	碧梧桐句集	二五五
尾崎紅葉	三六	裸の王様	二五七	観音岩	二五五	上林 曉	二五五
金色夜叉	三六	葛西善藏	二五七	ふところ日記	二五五	聖ヨハネ病院にて	二五五
三人妻	三六	子をつれて	二五七	川口一郎	二五五	蒲原有明	二五五
多情多恨	三六	梶井基次郎	二五七	二十六番館	二五五	有明集	二五五
尾崎士郎	三六	檸檬	二五七	川口松太郎	二五五	春鳥集	二五五
人生劇場	三六	加藤楸邨	二五七	鶴八鶴次郎	二五五	木々高太郎	二五五
尾崎放哉	三六	寒 雷	二五七	川崎長太郎	二五五	人生の阿呆	二五五
大山 空	三六	加藤道夫	二五七	裸 木	二五五	菊池 寛	二五五
小山内 薫	三六	なよたけ	二五七	川路柳虹	二五五	真珠夫人	二五五
息 子	三六	仮名垣魯文	二五七	路傍の花	二五五	忠直卿行状記	二五五
大仏次郎	三六	安愚楽鍋	二五七	川 田 順	二五五	父帰る	二五五
赤穂浪士	三六	金子光晴	二五七	驚	二五五	無名作家の日記	二五五
帰 郷	三六	鮫	二五七	川端茅舎	二五五	岸田国士	二五五
織田作之助	三六	加能作次郎	二五七	川端茅舎句集	二五五	牛山ホテル	二五五
夫婦善哉	三六	世の中へ	二五七	川端康成	二五五	紙風船	二五五
落合直文	三六	上司小剣	二五七	浅草紅団	二五五	暖 流	二五五
萩之家歌集	三六	鱧の皮	二五七	伊豆の踊子	二五五	北川冬彦	二五五
尾上柴舟	三六	嘉村磯多	二五七	禽 獸	二五五	戦 争	二五五
永 日	三六	途 上	二五七	純粋の声	二五五	北園克衛	二五五
小野十三郎	三六	亀井勝一郎	二五七	千羽鶴	二五五	円維詩集	二五五
大阪	三六	美貌の皇后	二五七	名人	二五五	北原白秋	二五五
於 母 影	三六	河井醉茗	二五七	山の音	二五五	思ひ出	二五五
尾山篤二郎	三六	塔 影	二五七	雪 国	二五五	桐の花	二五五
平明調	三六	河上 肇	二五七	河東碧梧桐	二五五	黒 檜	二五五
		自叙伝	二五七	三千里	二五五	邪宗門	二五五

— 8 —

作家別項目表

佐佐木茂索	困つた人達	佐多稲子	くれなゐ	私の東京地図	佐藤佐太郎	歩道	佐藤春夫	お絹とその兄弟	更生記	車塵集	殉情詩集	退屈読本	田園の憂鬱	都会の憂鬱	星	里見 弴	安城家の兄弟	善心悪心	多情仏心	椎名麟三	美しい女	永遠なる序章	志賀直哉	暗夜行路	城の崎にて
三〇	三〇	三〇	三〇	三三	三〇	三〇	二九	二九	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	
小僧の神様	和解	四賀光子	藤の実	獅子文六	大番	自由学校	島木赤彦	柿蔭集	島木健作	赤蛙	生活の探求	巖	島崎藤村	嵐	家	エトランゼ	新生	千曲川のスケッチ	破戒	春	夜明け前	落穂集	若菜集	島田清次郎	地上
二〇〇	七〇	七〇	七〇	七〇	二七	二七	二九	二九	二九	二九	二九	二九	三三	三三	三三	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
下村湖人	次郎物語	釈 迢空	海山のあひだ	十一谷義三郎	唐人お吉	春夏秋冬	抒情詩	白井喬二	富士に立つ影	新体詩抄	新村 出	南蛮記	杉田久女	杉田久女句集	鈴木泉三郎	生きてゐる小平次	薄田泣菫	白羊宮	鈴木三重吉	桑の実	千鳥	芹沢光治良	巴里に死す	ブルジョワ	千家元麿
三三	三三	七〇	七〇	七〇	二七	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九
自分は見た	統春夏秋冬	曾野綾子	遠米の客たち	高野素十	初 鵬	高橋新吉	の詩	高浜虚子	虚子句集	鶏 頭	俳諧師	高見 順	如何なる星の下に	故旧忘れ得べき	高村光太郎	智恵子抄	典 型	道 程	高山樗牛	滝口入道	わがそでの記	滝井孝作	無限抱擁		
三三	三三	三三	三三	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	

武田泰淳……………	突二	田中冬二……………	九	東京の三十年……………	突二	当世書生気質……………	突九
娘のすゑ……………	突二	青い夜道……………	九	時は過ぎ行く……………	突二	牧の方……………	突五
森と湖のまつり……………	突七	谷崎潤一郎……………	三	蒲団……………	突六	寺田寅彦……………	突五
武田麟太郎……………	三〇	愛すればこそ……………	三	禮 一雄……………	三三	冬彦集……………	六五
銀座八丁……………	三〇	陰翳礼讃……………	突	リッ子・その愛……………	三三	東海散士……………	一六〇
日本三文オベラ……………	三〇	鍵……………	一三	その死……………	三三	佳人之奇遇……………	一六〇
竹中 郁……………	三〇	細 雪……………	三六	近松秋江……………	三三	土岐哀果……………	突六
象牙海岸……………	三〇	刺 青……………	三六	黒 髪……………	三三	NAKIWARAI……………	突六
竹山道雄……………	三〇	春琴抄……………	三〇	別れたる妻に送る手紙……………	三三	徳田秋声……………	三三
ビルマの堅琴……………	三〇	少将滋幹の母……………	三〇	塚原健二郎……………	突六	足 迹……………	三三
太宰 治……………	三〇	蓼喰ふ虫……………	三〇	塚原健二郎童話集……………	突六	あらくれ……………	三三
お伽草紙……………	三〇	痴人の愛……………	三〇	土井晩翠……………	突六	新世帯……………	三三
斜 陽……………	三〇	田畑修一郎……………	三〇	天地有情……………	突六	仮装人物……………	一五
津 軽……………	三〇	鳥羽家の子供……………	三〇	土屋文明……………	突六	微……………	一七
東京八景……………	三〇	田宮虎彦……………	三〇	ふゆくさ……………	六二	縮 図……………	三三
人間失格……………	三〇	足摺岬……………	三〇	綱島梁川……………	六二	爛……………	三〇
走れメロス……………	三〇	霧の中……………	一七	病間録……………	六二	徳富芦花……………	三〇
晩 年……………	三〇	田村泰次郎……………	一七	壺井 栄……………	六二	思出の記……………	三〇
立原道造……………	三〇	肉体の門……………	三六	曆……………	六二	黒 潮……………	三〇
葦草に寄す……………	三〇	田村俊子……………	三六	二十四の躰……………	三三	自然と人生……………	三二
立野信之……………	三〇	木乃伊の口紅……………	三六	壺井繁治……………	三三	富士……………	三二
叛 乱……………	三〇	田山花袋……………	三六	壺井繁治詩集……………	三三	不如帰……………	三二
田中千禾夫……………	三〇	一兵卒の銃殺……………	三六	坪内逍遙……………	三三	みみずのたはこと……………	三二
おふくろ……………	三〇	田舎教師……………	三六	役の行者……………	三三	徳永 直……………	三二
田中英光……………	三〇	生……………	三六	桐一葉……………	三三	太陽のない街……………	三二
オリンポスの果実……………	三〇					外村 繁……………	三〇

作家別項目表

草 筏……………	二〇九	中 天の夕顔……………	四七	中村草田男……………	四六	三四郎……………	二九
富安風生……………	三〇	中 勸助……………	二〇	長 子……………	四六	それから……………	四二
草の花……………	三〇	銀の匙……………	二〇	中村憲吉……………	三三	彼岸過迄……………	四三
豊島与志雄……………	三〇	中里介山……………	四七	しがらみ……………	三三	坊つちやん……………	四三
野ざらし……………	三〇	大菩薩峠……………	四七	中村真一郎……………	三三	道 草……………	四六
		中島 敦……………	三七	死の影の下に……………	三三	明 暗……………	四七
内藤鳴雪……………	六〇	李 陵……………	三七	中村星湖……………	三三	門……………	四六
鳴雪句集……………	六〇	長田秀雄……………	四六	少年行……………	三三	吾輩は猫である……………	四六
直木三十五……………	五五	大仏開眼……………	四六	中村汀女……………	四七	成島柳北……………	三七
南国太平記……………	五五	長田幹彦……………	四六	汀女句集……………	四七	柳橋新誌……………	三七
永井荷風……………	元	澤……………	四六	中谷宇吉郎……………	六三	西野辰吉……………	四三
あめりか物語……………	元	中塚一碧楼……………	四六	冬の華……………	六三	秩父困民党……………	四三
腕くらべ……………	元	はかぐら……………	四六	中山義秀……………	四三	西脇順三郎……………	四三
おかめ笹……………	二八	長塚 節……………	四六	厚物咲……………	四三	あむばるわりあ……………	四三
珊瑚集……………	二五	土……………	四六	テニヤンの末日……………	四三	丹羽文雄……………	四三
すみだ川……………	三六	長塚節歌集……………	四六	長与善郎……………	四三	鮎……………	四三
断腸亭日乗……………	四〇	中西梅花……………	四六	項羽と劉邦……………	四三	厭がらせの年齢……………	四三
つゆのあとさき……………	四六	新体梅花詩集……………	四六	青銅の基督……………	四六	遮断機……………	四三
日和下駄……………	四六	中野重治……………	四六	竹沢先生と云ふ人……………	四六	菩提樹……………	四三
遷東綺譚……………	四六	歌のわかれ……………	四六	夏目漱石……………	四三	野上弥生子……………	四三
冷 笑……………	三七	美しき雑談……………	四三	思ひ出す事など……………	四三	海神丸……………	四三
永井竜男……………	三七	むらぎも……………	四三	硝子戸の中……………	四三	真知子……………	四三
朝 霧……………	三七	中原中也……………	四三	草 枕……………	四三	迷 路……………	四三
中江兆民……………	三七	山羊の歌……………	四三	虞美人草……………	四三	野口雨情……………	四三
一年有半……………	三七	中村吉蔵……………	四三	行人……………	四三	野口雨情集……………	四三
中河与一……………	三七	井伊大老の死……………	四三	こゝろ……………	四三	野口米次郎……………	四三

作家別項目表

二重国籍者の詩……………	三〇	浅草の灯……………	二〇
野間 宏……………	三八	林 房雄……………	二六
暗い絵……………	三八	青 年……………	二六
真空地帯……………	三七	林 芙美子……………	二八
萩原朔太郎……………	二〇	浮雲……………	二八
青 猫……………	二〇	晚 菊……………	二五
純情小曲集……………	二五	放浪記……………	二五
月に吠える……………	二五	葉山嘉樹……………	二六
橋本英吉……………	二五	淫売婦……………	二六
富士山頂……………	二五	海に生くる人々……………	二六
橋本多佳子……………	二五	原 月舟……………	二五
海燕……………	二五	月舟俳句集……………	二五
長谷川四郎……………	二六	原 石鼎……………	二五
シベリヤ物語……………	二六	花 影……………	二五
長谷川 伸……………	二六	原 民喜……………	二六
一本刀士侵入……………	二六	夏の花……………	二六
臉の母……………	二六	原田康子……………	二六
長谷川如是閑……………	二六	挽 歌……………	二六
ある心の自叙伝……………	二六	樋口一葉……………	二六
長谷川零余子……………	二六	一葉日記……………	二六
雜 草……………	二六	たけくらべ……………	二七
浜田広介……………	二六	にこりえ……………	二九
ひろすけ童話集……………	二六	久板栄二郎……………	二六
浜 浩……………	二六	北東の風……………	二六
		夢山修三……………	二六
		荒 地……………	二四
		日夏耿之介……………	二五
		黒衣聖母……………	二五
		火野葦平……………	二三
		赤い国の旅人……………	二三
		妻と兵隊……………	二六
		日野草城……………	二五
		花 水……………	二五
		平林たい子……………	二五
		かういふ女……………	二五
		施療室にて……………	二五
		広津和郎……………	二五
		作者の感想……………	二五
		神経病時代……………	二五
		風雨強かるべし……………	二五
		広津柳浪……………	二五
		雨……………	二五
		今戸心中……………	二五
		深沢七郎……………	二五
		檀山節孝……………	二五
		深田久弥……………	二五
		津軽の野つち……………	二五
		福沢諭吉……………	二五
		福翁自伝……………	二五
		福士幸次郎……………	二五
		太陽の子……………	二五
		福田恆存……………	二五
		キティ颱風……………	二五
		福地桜痴……………	二五
		春日局……………	二五
		藤森成吉……………	二五
		若き日の悩み……………	二五
		渡辺華山……………	二五
		二葉亭四迷……………	二五
		あひゞき……………	二五
		浮 雲……………	二五
		其面影……………	二五
		平 凡……………	二五
		舟橋聖一……………	二五
		鷺 毛……………	二五
		花の生涯……………	二五
		木 石……………	二五
		プロレタリア短歌集 (一九三〇)……………	二五
		北条民雄……………	二五
		いのちの初夜……………	二五
		星野立子……………	二五
		立子句集……………	二五
		細田民樹……………	二五
		真理の春……………	二五
		堀田善衛……………	二五
		祖国喪失……………	二五

作家別項目表

広場の孤独……………	五五	墨汁一滴……………	五五	白き手の猥人……………	五五	宮本百合子……………	五五
ホトトギス雑詠全集……………	五五	正宗白鳥……………	五五	三島由紀夫……………	五五	道標……………	五五
堀口大学……………	五三	牛部屋の臭ひ……………	五三	飯面の告白……………	五三	伸子……………	五三
月下の一群……………	五三	生まざりしならば……………	五三	金閣寺……………	五三	播州平野……………	五三
人間の歌……………	五三	人生の幸福……………	五三	近代能楽集……………	五三	風知草……………	五三
堀 辰雄……………	一五	毒婦のやうな女……………	一五	潮騒……………	五三	貧しき人々の群……………	五三
かげろふの日記……………	一五	何処へ……………	一五	水原秋桜子……………	五三	三好十郎……………	五三
風立ちぬ……………	一五	微 光……………	一五	富 飾……………	五三	炎の人……………	五三
聖家族……………	五三	マチネ・ポエティク……………	五三	三富朽葉……………	五三	三好達治……………	五三
菜穂子……………	五三	詩集……………	五三	水上瀧太郎……………	五三	測量船……………	五三
本庄陸男……………	五三	松瀬青々……………	五三	大阪の宿……………	五三	武者小路実篤……………	五三
石狩川……………	五三	妻 木……………	五三	貝殻追放……………	五三	愛 慾……………	五三
前川佐美雄……………	五三	松根東洋城……………	五三	三宅花圃……………	五三	お目出たき人……………	五三
植物祭……………	五三	新春夏秋冬……………	五三	藪の鷺……………	五三	幸福者……………	五三
前田河広一郎……………	五三	松本たかし……………	五三	宮沢賢治……………	五三	真理先生……………	五三
三等船客……………	五三	真 船 豊……………	五三	風の又三郎……………	五三	その妹……………	五三
前田普羅……………	五三	真 船 豊……………	五三	セロ弾きのゴー……………	五三	人間万歳……………	五三
普羅句集……………	五三	中橋公館……………	五三	シ ュ……………	五三	友 情……………	五三
前田夕暮……………	五三	真山青果……………	五三	春と修羅……………	五三	村上鬼城……………	五三
生くる日に……………	五三	元禄忠臣蔵……………	五三	宮地嘉六……………	五三	鬼城句集……………	五三
牧野信一……………	五三	平将門……………	五三	老 残……………	五三	村上元三……………	五三
ゼーロン……………	五三	南小泉村……………	五三	宮島資夫……………	五三	佐々木次郎……………	五三
正岡子規……………	五三	三 木 清……………	五三	抗 夫……………	五三	村上浪六……………	五三
寒山落木……………	五三	人生論ノート……………	五三	宮 柵二……………	五三	三日月……………	五三
竹乃里歌……………	五三	三木露風……………	五三	山西省……………	五三	村野四郎……………	五三
						体操詩集……………	五三

作家別項目表

村山知義……………	三三	安岡章太郎……………	三三	山本有三……………	一〇〇	吉岡禪寺洞……………	三三
暴力団記……………	三三	悪い仲間……………	三三	嬰兒殺し……………	一〇〇	銀漢……………	三三
室生犀星……………	六	保田与重郎……………	三三	女の一生……………	一〇〇	吉川英治……………	三三
愛の詩集……………	六	日本の橋……………	三三	同志の人々……………	三三	新平家物語……………	三三
あにいもうと……………	六	矢田挿雲……………	三三	波……………	三三	宮本武蔵……………	三三
杏つ子……………	三	太閤記……………	三三	路傍の石……………	三三	吉田一穂……………	三三
抒情小曲集……………	三	柳田国男……………	一〇	結城哀草果……………	三三	未来者……………	三三
幼年時代……………	三	海南小記……………	一〇	山麓……………	三三	吉屋信子……………	三三
森 鷗外……………	三	矢野龍溪……………	三三	横瀬夜雨……………	三三	良人の貞操……………	三三
阿部一族……………	三	経国美談……………	三三	花守……………	三三	吉行淳之介……………	三三
牛タ・セクスアリ……………	三	山口誓子……………	三三	横溝正史……………	三三	驟雨……………	三三
雁……………	三	凍港……………	三三	本陣殺人事件……………	三三	与田準一……………	三三
山椒大夫……………	三	山口青邨……………	三三	横光利一……………	三三	五十一番目のザボン……………	三三
江江抽斎……………	三	雜草園……………	三三	機械……………	三三	竜胆寺雄……………	三三
青年……………	三	山崎豊子……………	三三	上海……………	三三	放浪時代……………	三三
即興詩人……………	三	暖簾……………	三三	日輪……………	三三	若山牧水……………	三三
高瀬舟……………	三	山代 巴……………	三三	紋章……………	三三	別離……………	三三
舞姫……………	三	荷車の歌……………	三三	旅愁……………	三三	和田 伝……………	三三
妄想……………	三	山田美妙……………	三三	与謝野晶子……………	三三	沃 土……………	三三
森田草平……………	三	蝴蝶……………	三三	みだれ髪……………	三三	渡辺水巴……………	三三
煤煙……………	三	山之口 蝶……………	三三	与謝野鉄幹……………	三三	水巴句帖……………	三三
森田たま……………	三	山の口 蝶……………	三三	紫……………	三三	和辻哲郎……………	三三
もめん随筆……………	三	山崎暮鳥……………	三三	酒はがひ……………	三三	古寺巡礼……………	三三
森本 薫……………	三	聖三稜玻璃……………	三三				
女の一生……………	三	山本周五郎……………	三三				
		横の木は残った……………	三三				

あ

藍色の墓

あゐり

詩集

大手拓次

昭和十一年（一九三六）

二月、アルス刊。第一遺作詩集。詩二五五編。

【鑑賞】『藍色の墓』は、大手拓次が茅ヶ崎南湖院で病没（昭九・四）後、友人逸見享（画家）が遺稿を補足編集して出版したものである。この詩集は、詩発表の全時期、大正元年から昭和八年までに『朱樂』『創作』『地上巡礼』『ARS』『詩と音楽』『詩情』『日光』『詩と版画』『アルス・グラフ』『近代風景』『中央公論』誌上に掲載された詩と、未発表の遺稿とより成る大手拓次詩集と言つてよい。拓次は群馬県磯部温泉の名家（宝来館）の次男に生れ、幼時に両親を失つて祖父母の手で育てられた。一七歳（明三七）で脳を患ひ、治癒したが片耳が遠くなり、嗅覚だけが異常に発達していた。このころから詩人になろうと詩を作りはじめた。この履歴は、拓次の詩風の重要な素因である。二五歳（明四五）「私の象徴詩論」を早大英文科に提出して卒業、間もなく『朱樂』に詩を投じて北原白秋傘下の新進と目された。しかし処女のように内気な拓次は、白秋にさえ会つたのは生前一回きりで、詩壇に少しの野心もなかった。大

正四年ごろまで吉川惣一郎の筆名を用いたが、これは愛する美少年の名を組み合わせたものという。詩集にあるこの前期の詩は『藍色の墓』『陶器の魂』『枯木の馬』『撒水車の小僧たち』などどれをとっても、怪奇豊麗な幻夢に色どられていて、その異常な触感と暗鬱な香気を最も濃く漂わせている。詩集『藍色の墓』はこの時期にこそ出るべきであった。大正五年ライオン歯磨広告部に勤め、以後二〇年間、世間には内気で忠実なただの一社員として童貞の生涯を閉じた。後期の詩風はあまりに感傷になずみ冗長に流れたが、同僚の一少女に対する清いブラトニク・ラブの思いを綿々と詩語にのみ紡いでいて、第五章『香料の顔寄せ』の一連の詩や散文詩『噴水の上に眠るものの声』など、拓次の詩の語彙と文体を觀賞するには都合がよい。

（象よ歩め）

赤い表紙の本から出て
皺だみた象よ、口のないう大きな象よ、のろのろあゆめ、
ふたりが死んだ床の上に。
疲労ををどらせる麻酔の風車、
お前が黄色い人間の皮をはいで
深い真言の奥へ、のろのろと秋を背に負うて象よあゆめ、
おなじ眠りへ生の嘴は動いて、